

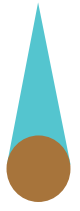
mi rai kan

未来館 news

福島県男女共生センター広報誌



vol. 42



福島県男女共生センター「女と男の未来館」は、平成23年1月18日に誕生10周年を迎えました。これを機に様々な「未来館誕生10周年記念事業」を開催してきましたが、平成23年1月22日に開催したスペシャル講演をもって、第10弾までの全ての記念事業が無事終了しました。これまで未来館を支え、応援して下さいました皆様に心から感謝申し上げます。

本号では、未来館誕生10周年記念事業の第5弾から第10弾までを特集します。



山崎大地さんスペシャル講演 「宇宙主夫。妻と娘と夢を追いかけて」

平成23年1月22日（土）に開催した今回の講演は、「男性」の新しい生き方、「家族・夫婦」の新しいかたちについて考え、また、男女共同参画をより身近な問題として感じていただけるよう、実業家で宇宙飛行士山崎直子さんの夫でもある山崎大地さんをお迎えしました。妻や家族を支える主夫としてのご自身の経験や、男性も女性もお互いの生き方を尊重すると共に、自分自身の生き方を充実させていくことの大切さなどを、ふんだんな映像の紹介とあわせ、ユーモアを交えてお話いただきました。

本日は色々な立場の方や幅広い年代の方にお集まりいただいているということですので、これからお話する私たち家族の経験してきたことの何かから、心に感じるもの、あるいはお気づきになれること、共感されることがあれば嬉しいです。

最初に、宇宙飛行士の夫として自分の夢を一旦我慢し、子育てと介護に奔走した体験と、そこに至るまでの経緯をお話したいと思います。私達夫婦には、それぞれ妻は宇宙飛行士に、私は国際宇宙ステーションの管制官になりたいという夢がありました。二人とも宇宙の夢を抱いて、幼い時からアニメを見て、人が宇宙に行くことが当たり前の時代が来るんだろうなあと思っていました。

私の夢である国際宇宙ステーションの宇宙管制官というのは、正式には地上管制要員といいますが、「管制官」といった方がイメージしやすいので、こういう呼び方をしています。国際的にはフライトコントローラーと呼ばれています。宇宙の仕事には、宇宙に行くだけではなく、管制官のように地上から宇宙船をコントロールするという仕事もあります。よく、宇宙船は宇宙飛行士が操縦しているようなイメージを持たれがちですが、全て自動で動いて、危機的な機器の故障があった時など、問題が起きた場合には地上から遠隔で操作します。つまり、管制官達が宇宙船を遠隔で動かしているのです。宇宙飛行士は宇宙船を動かしているのではなく、宇宙船の中にある実験装置を動かしたり、あるいは機器の交換を行ったりなどの作業をします。

日本がまだ宇宙船を持っていなかった2000年頃、私はジョンソン宇宙センターの中にあるミッションコントロールセンターという建物の中で、半年間くらい実地訓練を受けていました。訓練を受けていた時は、最終的には管制官になる夢を諦めなければならない時がくるとは思ってもいなかったのですが、夢に向かってばく進んでいるうちに最高に幸せな時でした。夢が叶ってNASAで仕事をしている、いつか国際宇宙ステーションの管制官になれると思いきや、ワクワクしながら仕事に、訓練に取り組んでいました。ちょうど妻も私も、自分の夢の実現に近づいてこのまま訓練を続けていけば自分達の夢は叶うだろうという時期、そして、管制官になれば次のステップはどうしようかと考えていた時期でもありました。結婚前のまだお互いに面識が無かった時に、彼女は宇宙飛行士に選ばれたのですが、そのプロフィールには「独身」と書いてありました。それを見た私

は、管制官になった暁には管制室から彼女にプロポーズしようという次の夢を抱いて、後日、自己紹介をした時に「私は管制官になることが夢です。そして管制室から角野さん（山崎直子さんの旧姓）にプロポーズします！」と言いました。その時はさらっと流されてしまいましたが（笑）。彼女は「ママさん宇宙飛行士になりたい。女性としては向井さんという方が道を切り開かれているが私はその次の道を切り開きたい」と言っていました。そうすると宇宙に行く時には子どもがいけないといけません。管制室からプロポーズすることが不可能となるので、「スペースシャトルの帰還したばかりの滑走路の上で結婚式をしたい」という別の夢を考えたのです。ママさん宇宙飛行士という偉大な夢と、滑走路での結婚式というお互いの夢を持ちながら、2000年について結婚をしました。その後、夫婦共働きの生活が始まりますが、それぞれ仕事を続けていましたし、彼女の方がそれまでの立場もあまり変えたくないと言っていたので、角野直子、山崎大地という夫婦別姓でのスタートでした。

2001年9月、妻は正式に国際宇宙ステーションの宇宙飛行士に認定されました。さらに神様が味方してくださいまして、その年の12月には子どもができました。夫婦そろって母子手帳をもらいに行ったり、検診に行ったりと、全て夫婦一緒に準備をし、2002年8月に無事に出産しました。ここでようやく日本初のママさん宇宙飛行士の夢へ限りなく近づきましたが、実際に宇宙に飛ぶまでにはその後8年かかりました。その間には育児休暇を夫婦で3ヶ月ずつ取得しました。妻は約8週間産休を取りましたが、「もう2ヶ月も休んだので訓練に乗り遅れる。乗り遅れると宇宙に行けないかもしれない」といつも怯えていて、すぐに復職しましたので、育児は私が先に取りました。私の出向先の会社の中では男女合わせて育児休暇を取ったのは私が初めてでしたし、妻の所属するJAXA（当時はNASDA）でも育児休暇を取って復帰した女性は妻が3番目だったそうです。女性は結婚したら、あるいは出産したら会社を辞めるという時代でした。私達の場合は、二人とも仕事をしたいし、二人とも家事をしないと回らないという状態でしたから、お互いに仕事と家庭のバランスを取りつつ、かつ夫婦の間でもバランスを取って不公平感が出ないように意識していました。

子どもが生まれた半年後には、私達の生活を一変させる事故が起きました。スペースシャトルコロンビア号の事故です。計画が中断され、日本人が宇宙飛行士として搭乗する「スペースシャトル」が

なくなってしまったのです。そうすると、日本人が宇宙に行く手段はロシアの宇宙船ソユーズに搭乗して宇宙ステーションに行くしかありません。そこで、妻はソユーズの資格を取るために単身ロシアに行くことになりました。

そこからが父子家庭の始まりでした。さらに、我が家にはもう1つ「両親の介護」という大きな課題がありました。私は、父が54歳、母が39歳の時に生まれたので、このころ父の年齢は既に80歳を超えていました。実は結婚当初から介護が始まっていたのですが、昔の人というのは、親の介護は「長男の嫁がやるのが当然だ」という考え方をしていたため、妻にはなかなか介護のことを言えませんでした。私は全く世代が違っていたので、それは違うと思っていましたし、家族もみんな仕事をしていたので、自分の親を介護するのがお互いが一番いいだろうと思い、姉と二人で4年くらい介護して父を看取りました。父は私が学校に入る時にはもう60歳で、家庭に時間を注げるようになっていたので、育児も掃除も洗濯も料理も全て父親も母親と同じようにやるという環境で育ちました。また、とても愛情を込めて育てられたので、いつかは恩返しをしないとけないと覚悟していました。母も体が弱くなり入院するようになると、私に力を与えてくれたのが娘でした。娘は両親にも力を与えてくれましたし、私にとっても、一緒に頑張るパートナーがいるということが非常に大きな心の支えでした。今でも感謝せずにはいられないほど、大きな存在です。娘の1歳の誕生日には、娘と2人でロシアの妻のところへ押しかけて3人で誕生日祝いをするなど、父子家庭中は本当に色々なことがありました。しかし、ようやく妻がロシアから帰ってきて一安心と思っていたら、10日後にはアメリカに行ってしまうので、NASAが1年半後くらいにスペースシャトルを再開するというのが見えてきたので、今度はスペースシャトルの資格を取るようになったからです。

ここで第2部のアメリカでの生活につながっていくのですが、この時妻は「アメリカに最低2年の出張」と言われていました。これ以上、それも最低もう2年父子家庭を続けて行くのは難しい。私は非常に悩み、「家族って一体何だろう？」と考えた結果、自分が子どもを連れてアメリカに渡ることを決意しました。ただし、日本でのフライトコントローラーの仕事をしているとアメリカには行けませんので、私は会社を辞めて家庭に入りました。そしてその時に、夫婦同姓にして妻が宇宙に行くことを家族全員で応援しよう、チームヤマザキとして一丸となって頑張ろうと決意しました。

私は妻の扶養家族になったので厚生年金から国民年金第3号に変わりましたが、この時にわかったのは、専業主婦の場合夫が亡くなれば妻は遺族年金をもらえますが、その逆はないということです。妻が死んでしまったら、私は遺族年金をもらえません。その場合、男性は自分で働けということです。なんて不平等だと、まだまだ男女共同参画社会実現への道のりは遠いと感じました。アメリカはもっと進んでいて、男女平等や夫婦共働きは当たり前で、逆に扶養家族や主婦（主夫）はあまりいません。そんなアメリカで最初につまずいたのが、日本の住基ネットのように、アメリカで一人ひとりに与えられるソーシャルセキュリティナンバーを私はもらえなかったことです。これがないと携帯電話も買えないし、電気やガスの



契約をしたくても「奥さん呼んできて」と言われてしまうのですが、その原因というのは、「就労許可」をもらえなかったことです。なぜかというと、宇宙飛行士というのは政府外交官扱いでアメリカに渡りますので、私は政府外交官の配偶者という立場になります。そのため配偶者は就労許可がもらえません。アメリカは日本政府の許可があれば就労許可を出すのですが、日本側がOKしてくれませんでした。前例がないというのです。外交官の妻（夫）たるもの家庭に入って夫（妻）を支えるものだ、という感じなのではないでしょうか。妻の会社の上司がサインしてくれば済む話なのですが、結局、何度頼んでも無理でした。妻に「あなたの会社はどうなっているの？」と言ったら、妻は最後に「じゃあ、辞めなきゃよかったの」と一言、言いました…。

妻のために辞めたのに、妻に辞めなければよかったのと言われて、訳がわからなくなってきて、ショックのあまり「死にたい」とまで思ったこともあり。毎日部屋に閉じこもって考え続け、シーツをクローゼットの棒に掛けて、輪っかを作って「もう死のう」と思うくらい思い詰めていたのです。しかし、「いや、待て。子どもと母親の介護はどうする」と死ぬのを思い止まりましたが、それでも1週間くらい悩み続けました。悩んだ結果思い立ったのは、「死ぬ気になれば何だってできる」ということです。アメリカ永住権を取って働こうと、さらに、せっかくアメリカに来たのだから、アメリカでしかできない生活をしようと思いきや、家を買う代わりに船を買って住もうとしました。すると、また妻の上司からダメだと言われてしまいました。もう日本の宇宙機関とは関わりたくないと思いつつも、私も仕事をしなかったため、なんとしてでも宇宙の仕事でアメリカでやってやろうという思いで、「有限会社国際宇宙サービス」という会社を作りました。自分で会社を作ると、社内規定なし、就労規則なし、しがらみなし、全部自由。さらに上司もいない。同僚もいないし部下もいないから全部自分でやるのですが、それでも自由に何でもできるのが非常によかったです。

大変だったのは、アメリカでの育児です。親戚も仲間もいないうえに言葉の壁があり、常に孤独でした。見知らぬ地に赴任した小さい子どものいる妻が、夫は会社に行っているからいいけど自分には友達もいないというような孤独な状態です。そのアメリカ版のような感じになっていました。そうしている間に妻は順調に訓練を続け、約1年半かけて3つ目の宇宙船の資格を取りました。

さあ次は私の番だと思いました。1度会社を辞めていますが、日

本に帰ってきたら元の職場に戻れるという覚書を会社で作っていたので、安心してアメリカについて行けたのです。けど妻は、最低2年と言われていた出張の後、今度はアメリカに“赴任”になってしまいました。日本人宇宙飛行士でアメリカに行った人は、たいてい20年くらいはアメリカで生活します。私が日本に帰って自分の夢を叶える、国際宇宙ステーションの管制官になって「きぼう」の組み立てに携われるのはこの時しかなかったの、どうしても日本に帰りたかったのですが、妻はアメリカに残りたい。私は「あなたについてアメリカに行ったのだから、今度は私の夢のために日本に帰ってきて欲しい」と妻に言いましたが、妻は「向井さんご夫婦って日本とアメリカで、それぞれの仕事を続けていたじゃない」と言うのです。女性が宇宙飛行士になって、それを支える夫がいるということは、当時は凄く偉大なことだったと思います。別居も我慢すれば何とかできるでしょうけれど、よく考えてみると家族はやはり一緒にいた方がいいと思うのです。特に子どもがいたらなおさらです。向井さんご夫婦は「自分たちはいい例じゃない」と訴えているのですが、世間は「素晴らしい」と評価する。その時に思ったのは、私達家族が苦労すればするほど次の人達も同じように苦労してしまう。これはいかん、どうにかせねばと悩みました。でもアメリカに残っても私には宇宙の仕事はありませんし、何より目の前にNASAがあるのに仕事ができないというのが非常に辛かったです。悩みに悩んで、悩みすぎると「うつ病」になってしまうのですね。それまでの育児や介護、退職、起業などのストレスも積み重なっていったのだと思います。仕事もできず、家も変わりましたし、家族もバラバラな時間が多い。父も亡くなりショックを引きずっていましたし、二人目の子どもも作れない。全部積み重なると「神様…どうして私はこんなに辛いのか」となります。

一方、妻の仕事は順調に進んでいました。しかも妻は「きぼう」の管制室から土井隆雄さんの宇宙飛行を支援することになったのです。「管制室は僕のポジションだよ。なぜ宇宙に行かないでそこにいるの。そしてなぜ僕が家で子育てをしなければならぬの？ ママさん宇宙飛行士になりたいのはあなたでしょ？」と納得できなくなりました。妻に夢の管制室を取られてしまった私は、「妻より先に宇宙に行ってやる」と考え、アメリカの民間企業が作っている弾道宇宙船をチャーターし、宇宙旅行の添乗員になりました。日本の企業やお金持ちの方の宇宙旅行をプロデュース・サポートと一緒に宇宙に行くというのを考えだしたのです。新しい夢の宇宙専門企業を作り、仲間も増えて「これならいける。新しい夢にしよう」と思い、妻とも別れようという気持ちになっていました。本当は夫婦がもっと話し合い、理解し合わなければいけないのに、どんなに話しても平行線の議論だったのです。他の人に相談しても「宇宙飛行士の夫なのだから、仕方がない」と言われます。女性達が「女性なのだから」と言われてきたのは、こういうことなのだと思います。こんな理不尽な思いをしながら、約1年間離婚調停をしましたが、いつも裁判長からは「とにかく家族で話し合ってください」と言われました。そうこうしているうちに、アメリカの永住権が取れ、これは「神様がアメリカに行けとっているのかな」と思ったのと、調停員を挟んで妻と話しているうちにお互いの立場を認め合えるようになり、お互いに歩み寄ることができまし



た。方向性を合わせ、私が妻と同じくNASAで働くことができればそれでいい、と思ったところにまた壁が現れました。当時のNASAは、スペースシャトルが退役することが決まり、その影響で失業者が増えていたため、経験もないアメリカ人以外は受け入れる余裕がなかったわけです。なんとかならないかと努力しているうちに、ついにスペースシャトルディスカバリーの打ち上げのとききました。星出宇宙飛行士が乗っているこのスペースシャトルの中には、国際宇宙ステーション「きぼう」が載っています。これを打ち上げて、組み立て、起動し、運用するというのが私の夢でした。娘に「ああ…パパの夢飛んで行っちゃったよ。パパの夢があそこに載っているんだよ」と言ったら、娘は無邪気に「おめでとう」と言ってくれたのですが、とても複雑な気持ちでした（苦笑）。それからすぐに、母が介護施設で倒れて病院に入院してしまったので、急遽日本に帰ることになりました。アメリカでも就職できないことがわかりましたし、日本に帰って娘に小学校受験をさせ、母親のそばで介護をしようと思っていると、また神様がイタズラします。妻が正式に“宇宙へ”と選ばれてしまったのです。娘は受験に成功して日本の小学校に入学しましたが、ようやくJAXAが重い腰を上げて私に仕事をくれました。ただ、なぜ会社を辞める時にこうしてくれなかったのかと思うと嬉しいのか悲しいかわかりませんでしたし、アメリカに行っていいいのかどうか悩みましたが、大きな海を見ながら「もう、なるようになれ」と開き直り、娘の学校にも許可をもらい、娘を休ませて、ついに家族揃って最後の訓練に臨むことになりました。

私はJAXAが用意してくれた仕事をしながら、NASAのミッションコントロールセンターに戻ることができました。国際宇宙ステーションの管制室中ではありませんが、その隣の部屋で運用支援の仕事をしたが、妻はどんどん訓練を積み重ねていきます。いろいろあって結局運用支援の仕事は2ヶ月あまりで辞めることになったのですが、一方で打ち上げが近づいてくると、家族も訓練に参加させてもらえ、飛行機に乗る訓練や緊急脱出の訓練など、好きなだけ見せてもらえます。訓練を見せてもらえると、これなら絶対大丈夫だという安心感が得られますし、これだけ訓練をやったのだから事故があった時にはしょうがないと諦めもつきます。NASAは2回もスペースシャトルの事故を起こしていますので、家族に対しては充分すぎるほどケアしてくれます。宇宙への出発準備もたくさんあるので、家族は手伝わなければならないことが山ほどありました。

ただ、打ち上げ前日にはもう何もすることはありません。子どもの時から考えれば25年、宇宙飛行士に選ばれてからでも11年、ようやく妻は夢だった宇宙に行くのです。そして昨年4月5日、つ

いにその時が来ました。それまで当事者の感覚だったので、全然心配も、不安ありませんでしたが、一視聴者のような形でテレビを通して妻の勇姿を見ると、不思議なもので本当にドキドキと不安になってくるのです。その後飛行士の家族達は、打ち上げ観覧用の特別席に移動して、すぐ近くで打ち上げを見ていました。娘は発射されたスペースシャトルが、一見すると落ちていくようにも見えたので「ママはあのまま落ちちゃうの!？」と慌てていましたが、「大丈夫。ちゃんと地球の向こう側へ回って飛んでいくんだよ」といながら打ち上げを見ていました。飛んだ瞬間には、「やっと終わった…」、「もう待たなくていいんだ。やっとこの10年が終わるのか」としみじみと思いました。そして、その直後に「やったー!」と喜びが湧いてきました。

妻が宇宙に行っている間は、妻の活躍をテレビなどで地上から見ながら、娘も私も普段通り地上での生活をしています。ただ、宇宙から携帯電話に電話がかかってくることもありますが、電子メールもできますから、妻がアメリカから日本などに出張している時よりもよほど近いと感じていました。そしていよいよ、2週間のミッションを終えて地球に帰ってきて、妻が最初に言った言葉は「重力って重い」という感想でした。

以上が、妻が宇宙に飛び立つまで、ママさん宇宙飛行士が誕生するまでの秘話でした。この10年間で総まとめするのはなかなか難しいですが、男女共同参画の視点から言えば、当時男性用トイレにはおむつ交換台がなかったし、個室の中に子どもを座らせておく場所もありませんでした。今はどちらにもおむつ交換台ができてきましたし、最近では、男性用と女性用のトイレの間に共用の多目的トイレがあるので便利になってきました。もし当時、男女同時にそういう準備をしていたらもっと男性が育児に関わるのが早まったのではと思います。それから、娘が他のお母さんの前で泣いたりすると、「やっぱりママがいないとね〜」と言われることもありましたが、こんなに頑張っているのに「ママじゃない」と言われると、非常にへこみます。今の時代はもう「男」とか「女」ではなく、「人」として、または「親」として子育てをする環境を整えていかなければならない時代です。

そして、私が強調したいのは「我が家はまだまだいいお手本ではない」ということです。女性が宇宙に行くとか、母として宇宙に行くということにはとても大きな意義があるかもしれませんが、その裏では私も娘もそして親も苦労しましたし、夫婦のどちらか一方が我慢して、どちらか一方の夢が叶ったにすぎないという中途半端な状態です。それを美談や良いお手本にはして欲しくないのです。我が家は、これまでの男の人と女の人の役割がただ入れ替わっているだけです。これからはどちらの夢も叶うように、男だからとか、女だからとかではなく、夫婦や家族が協力しなければ、今のこの厳しい状況を乗り越えていけないのではないのでしょうか。家庭と仕事のバランスをとるといっても、誰か一人にしわ寄せがきて不公平にならないよう、男も女も、妻も夫も、親も子どもも兄弟もみんながフェアであることが大事だと思います。こういったことは当たり前前で、どこかの本にも書かれていそうな話ですが、実践

しようとするとも難しいのです。ではなぜ自分にはできたのかと考えると、やはり自分の両親がお手本になっているのではないかと思います。両親が年を取ってからの子どもでもしたから非常に愛情を込めて、優しく自由に育ててくれました。その結果、怖いもの知らずで、やれば何でもできると思うようになりました。また、父が育児をしていたから私も自然と育児をするようになりましたし、親が優しく育ててくれると、介護の時にも親に優しく接することができるのだと思いました。

充実した人生を送るため、男だから女だからと考えるのをやめて、家族として、福島県民として、日本人として、さらには地球人としてくらの勢いで、広い視野で物事を考えることのできる社会が広がってほしいなと思います。

今後とも、宇宙家族ヤマザキ、チームヤマザキとして頑張っていきたいと思っておりますのでよろしくお願いたします。

◆質問者①：直子さんは夢が叶ったことで世界観が変わったと思いますが、宇宙から帰ってきて、大地さんへの接し方は何か変わりましたか。

◇山崎：大きく変わりました。ああ言えばこう言うということがなくなり、「そうだね」と聞いてくれるようになりました。飲み屋で向かい合って飲んでいながらも、肩を並べてカウンターに向かっていて、歩調を合わせて、同じ方向に進んでいけるようになったと思います。環境が制限された中からついに解放されて、自分のことよりも次は家族とか、子どもとか少し気持ちの余裕が出てきたのだと思います。これからはきっと、私の夢に向かって頑張るのではないかと考えています。

◆質問者②：去年、俳句の募集に応募して「きぼう特別賞」を受賞し、表彰式の時に直子さんから温かい握手と感想をいただきました。凛としたお姿から本当に素晴らしい女性であると感じましたが、陰には夫である大地さんの大変なご苦労があったということを知りました。本当にご苦労様でした。

◇山崎：そう言っていたら、私も妻を支えてきて、本当によかったなと思います。今、涙が出そうです。本当にありがとうございます。



サイン会の模様



福祉機器を体験

未来館シネマ倶楽部 プレミアム

12月17日(金)、18日(土)、19日(日)、24日(金)、25日(土)、26日(日)の6日間、多様な生き方や男女共同参画とは何かについて映画を通して深く考えていただくため、「女性・男性の生き方」、「ジェンダー」、「自分らしさ」、「人権」「性的マイノリティ」がテーマとなっている作品、映画界ではいまだマイノリティである女性監督の作品など10作品を上映し、のべ500名の方が観覧しました。

また、連日福島こどものみらい映画祭実行委員長で、メディアとしての映画を研究されている久我和巳さん(福島大学教授)による映画の見どころの解説もあり、映画をより深く楽しんでいただくことができました。

今号では特別に、久我さんに映画史やそこに観る女性の生き方、映画の持つ可能性について解説をいただきました。(6ページから)

上映作品

タイトル	制作年	制作国	上映日
ヘドウィグ・アンド・アングリーインチ	2001	アメリカ	12月17日
ミルク	2008	アメリカ	12月18日
リリイ、はちみつ色の秘密	2008	アメリカ	
小さな中国のお針子	2002	フランス(中国語)	12月19日
七夜待	2008	日本	12月24日
ココ・アヴァン・シャネル	2009	フランス	
アニー・リーボヴィッツ レンズの向こうの人生	2007	アメリカ	12月25日
最高の人生の見つけ方	2007	アメリカ	12月26日
マルタのやさしい刺繍	2006	スイス	
サラエボの花	2006	ボスニア・ヘルツェゴビナ =オーストリア=ドイツ =クロアチア	



福島こどものみらい映画祭
実行委員長
久我 和巳教授(福島大学)

Profile

福島大学行政政策学類教授
1963年千葉県生まれ 1991年より福島大学行政社会学部講師、「言語文化論」総合科目「映画の世界・映画と世界」等を担当、助教授を経て、2007年より現職。専門分野は文芸社会学、共著に『国家をこえて地域をひらく——福島発・地域づくり新論』福島大学地域研究センター編(八潮社)、2009年から始まった「福島こどものみらい映画祭」の実行委員長をつとめる。

映画を見る視線——映画と女性

1. 『彼女の消えた浜辺』を見ながら考えたこと

昨年、日本でも公開されたイラン映画『彼女の消えた浜辺』(アスガー・ファルハディ監督、2009)は、カスピ海を臨む観光地へと向かう三組の夫婦とその子どもたち、彼らの知り合いで、最近、ドイツ人女性と離婚した独身男性アーマドの描写から始まります。彼らの何気ないやりとりから、「結婚」という揺るぎない価値を獲得しているカップルと、その価値を失ってしまったばかりの男性の差異が浮かび上がってきます。妻たちの一人、セピデーには、一つの思惑がありました。この旅を、自分の子どもの通う保育園の先生エリと、アーマドとの出会いの場にする、セピデーはこのアイディアに夢中になっており、友人たちも少しためらいを感じながらもやはり有頂天になっていき、何よりアーマド自身が、途中から合流したエリの魅力にとらわれていきます。

しかし、エリには何か秘密がある様子。携帯電話の着信にも出ようとせず、一泊の予定で来たのだから、すぐにも帰らねばならないと強硬に主張します。観光地に流れるゆったりとした時間の中で、突然、事態は急変します。子どもたちの一人が海で溺れ、大人たちは必死の救助活動をして、その子を救います。ほっとしたのも束の間、直前まで浜辺で子どもたちと風上げに興じていたはずのエリの姿がありません。溺れた子を救おうとして自分が海に消えたのか、誰にも言わずに黙って帰ってしまったのか、人々の間に不安と疑心暗鬼が漂い始めます。

エリの行方が不明であるばかりでなく、彼らのうちの誰一人として、彼女の本名も、素性も知らないということが明らかになると、人々は様々な解釈をして自己を正当化しようとし、嘘に嘘を重ねていきます。「エリ」とは何者だったのか、何のために見知らぬ人々との旅行に参加し、なぜ一刻も早く帰ろうとしていたのか。

1979年のイラン・イスラム革命以降、イランはイスラム法に基づき、聖職者による統治が続いてきました。女性たちは髪を見せないようにヘジャブをかぶることを余儀なくされ、身体の線が見えないような衣服を身にまとっています。結婚は神の命じた義務であり、一種の契約制で、離婚の申し出は夫の側にのみ属する権利です。80年代以降のイラン映画には、表現に対する厳しい規制があり、とりわけ大人同士の恋愛や女性の自立の描写は制限されてきました。そうした状況の中で、アッバス・キアロスタミ、モフセン・マフマルバフ、アボルファズル・ジャリリを始めとする優れた映画監督が現れ、そうした表現の規制を逆手にとって、スクリーンいっぱい、けっして裕福とは言えない子どもたちを活躍させながら、婉曲話法や皮肉を織り交ぜて、一種の寓話形式で貧困や抑圧、自由への渴望など、社会が抱える問題をえぐりだし、イラン映画の黄金時代を築きました。

2000年に製作されたオムニバス映画『私が女になった日』(マルズィエ・メシュキニ監督)の中の一本では、ペルシャ湾のキシユ島を舞台に、9歳の誕生日を迎えた少女の半日が描かれます。誕生日、祖母と母によって、彼女は今日からチャドルと呼ばれる黒い衣装を着て、男の子と遊んだり、口をきいたりしてはいけないと言い渡されます。彼女には幼なじみの男の子がいて、彼にそのことを伝えるために正午までの猶予が与えられます。海岸に一本の小枝を指して、その影が消えるまでの短い時間、二人は、大人たちの与える規律を理解できないまま噛み合わない会話を交わし、一本のキャンディを舐めながら、別れの儀式をします。抗議の声をあげる一切のすべてを持たない二人のあどけない眼差しに胸を打たれる一本です。同年の『チャドルと生きる』(ジャファール・パナヒ監督)では、生まれてきた赤ん坊が女の子であったために「離婚されてしまう」とあわてふためく母親、警官の姿に怯える仮釈放中の女性たち、身分証明書がないためにバスの乗車券も買えない女性たちの運命を静かに見つめます。彼女たちの困難は、個人の困難ではなく、イランという固有の国家の困難でもなく、もっと普遍的な、私たちの身の回りの社会を見つめなおす切り口を提供しているようにも思います。

時代は変わって、『彼女の消えた浜辺』には、学歴も、ある程度の収入もある都市生活者たちの姿が描かれます。しかし、一見西洋化されているように見える彼らもまた、その社会が要請している規律から自由だというわけにはいきません。もちろん、映画は声高に女性たちの置かれた境遇に抗議することはありません。やがて明らかになるエリの状況、別れを告げてもそれが許されない婚約者の存在、追いつめられた男たちが保身のためにむき出しにする差別意識と暴力性、嘘と欺瞞の上にかろうじて成り立っていた安定、『彼女の消えた浜辺』はそれらを暗黙のうちに描き出すことで、イラン映画の新時代を刻みました。着衣のまま海に入る女性たちの衣服にまとわりつく重さ、エリが消える直前に高く昇っていく風を見つめる羨望に満ちた視線、ラストシーンでのセピデーの決意に満ちた表情を見逃すことはできないでしょう。

2. 映画史を振り返って

映画の歴史は、1895年12月28日、パリのレストラン「グラン・カフェ」で、フランスの実業家であったリュミエール兄弟が招待客を前に、有料で、動く複製画像を大きなスクリーンに映し出したことが始まりとされています。もちろん、写真・撮影技術、電気・機械工学、セルロイド・フィルムを作り出す化学の知見など、それまでに積み重ねられてきた様々な科学と技術の結晶として、映画の歴史を位置づけることもできるでしょう。リュミエール兄弟が使用した「シネマトグラフ・リュミエール」と名付けられた科学装置は、撮影機、現像機、映写機を兼用した巨大な機械で、動く物体を記録・

(c) 2009 Warner Bros. Entertainment Inc. All Rights Reserved. (c)2007 by Annie Leibovitz © 2008 Warner Bros. Entertainment Inc. All rights reserved. (C)2006 Buena Vista International (Switzerland) 2005 (C) coop99/Deblokada/noirfilm/Jadran Film/M. Hohne ©New Line Productions, Inc. ©Fine Line Features. All Rights Reserved. ©New Line Home Entertainment. All Rights Reserved. (c) 2009 Warner Bros. Entertainment Inc. (C) 2008 FOCUS FEATURES LLC. ALL RIGHTS RESERVED. (C)2009 Twentieth Century Fox Home Entertainment LLC. All Rights Reserved. (C) 2002 ALBATROS co.,ltd. All Rights Reserved.



12月24日サンタに扮して解説の様

再生することを目的としており、固定されたカメラ位置からわずか1分ほどの映像を撮影し、映し出すものでした。リュミエール兄弟の世界的に有名な「ラ・シオタ駅への列車の到着」には、列車が、轟音とともに（当時の映画はすべてサイレントでしたから、音が聞こえるはずもないのですが、そう錯覚させるくらいの迫力で）ホームに滑り込んできます。さらに、到着した列車からは、リュミエール兄弟の親類縁者と思しき着飾った女性たちが、いささかはにかんだような表情で降り立ってきます。映画は、人々の姿形、表情、衣服、たたずまいを「記録」することから始まったのです。

しかしながら、「列車の到着」が明らかに演出という要素を持っていたことから明らかなように、映画は、動く対象を「記録・再現」するにとどまらず、自らが動きを作り出すことによって、今日、「映画」と呼ばれるものに成長してきました。つまり、カメラ自身が動いて視点を変え、対象との間に別の動きを作り出すこと、二重露出、早回し、逆回し、スローモーション、入れ替えなどの様々なトリックを使用して演出すること、編集作業を通じて時間と空間に変化を与えること、これらの要素を発展させることで、単なる記録装置としての映画は、自らを「映画」に変えたのです。

当時の最先端の科学技術の結晶であるシネマトグラフの時代では、同時に機材の操作の難しさや重量という観点から、女性は映画製作の場からは基本的に排除されていたと考えられていました。しかしながら、「記録・再現」としての映画が今日の「映画」へと進化する過程で、科学技術のみならず、従来の文学や演劇、絵画などの芸術の要素が入り込んできます。映画が「総合芸術」と呼ばれるゆえんでもあります。初期の映画製作の過程における絵コンテ作りや記録、衣装やメイクなどの分野で、限定的とはいえ、多くの女性が参画していたという記録も残っています。

19世紀末、フランスのカメラ製作会社、ゴーモン社で働いていたアリス・ギイは、自らを「世界最初の女性監督」と自認しています。参考文献に挙げた『私は銀幕のアリス』はアリス・ギイが自らの人生を振り返って語る自伝の形式をとっています。彼女はやがて、働く女性が眉をひそめられるようなフランスを後にして、新天地アメリカ合衆国で多くの映画の脚本を書き、メガホンをとり、製作を務めました。女性にとって、アメリカのほうがフランスよりも労働環境がよいと彼女は信じていました。

20世紀初頭、サイレント映画が持つ特質、すなわち、高度な英語力を必要としなくとも出会い、享受できる手

近な娯楽として、移民の国アメリカでは、映画という新しいメディアは圧倒的な歓迎をもって迎えられました。意味は映画のストーリーそのものの中にあり、予備知識や教養を必要としないばかりか、西部劇、戦争映画、スラップスティック・コメディが醸し出すアクションは、旧世界の価値観を笑い飛ばし、吹き飛ばし、アメリカの大多数の民衆に受け入れられたのでした。映画史家ジョルジュ・サドゥールによれば、「1905年の初めころには10館しかなかったアメリカの映画館は、1909年の暮れにはすでに一万館近くになっていた。・・・このころのフランスの映画館数は二、三百を越えておらず、他の世界各国を合わせても二、三千を越えていなかった」ということです。アメリカの映画産業は激烈な競争を繰り返しながらも、変化に対して柔軟に対応し、幾人ものアリス・ギイの後継者を生み出しました。

そうして見ると、映画製作において女性の役割が限定されるようになったのは、1920年代後半のトーキーの誕生に端を発するとも言える面もあります。映画史の中で、技術の発展と、映画そのものの変質、観客層の変化、映画産業の構造転換には深い関係がありますが、その最たるものが、ワーナー・ブラザーズ社が将来予想される経済的困難に対応するために売り出したトーキー映画『ジャズ・シンガー』（アラン・クロスランド監督、1927）でした。映画は音声を獲得することによってより写実的になり、より求心力をもって作品世界の中に観客を惹き込むことが可能になりました。そして、それをさらに満足いくものにするために莫大な設備投資が必要になり、安定した経営基盤を築くためにハリウッドの映画産業は製作、配給、興行に関してしっかりした構造をもつスタジオ・システムを確立していきます。企画や脚本の作成、撮影・編集、配給と興行、各部門はそれぞれの専門家を擁する分業システムを確立していきます。今日まで少しずつ変化しながらも、時代の変化に適応してきたハリウッド映画産業の原型がここにありま。そして、20年代までの（女性たちが多く働いていた）独立系の映画製作会社は巨額の設備投資に耐えられず、閉鎖したり、メジャー各社に吸収されたりしていくことになりました。

30年代以降、女性が監督を務めることはめったになく、映画製作における女性の役割は極めて限定的なものになります。『花嫁は紅衣裳』（1937）などの監督を務めたドロシー・アーズナー、アルフレッド・ヒッチコックの公私にわたるパートナーとして多くの脚本を手掛けたアルマ・ネヴィル、ジョン・ハラスとともに英国初の長編アニメーション『動物農場』（1954）を作成したジョイ・バチュラーなどを除いては。



3. 「女性」映画とフェミニズム理論

トーキー映画の登場は、集客を見込める物語の型としての「ジャンル」と、観客が登場人物への

自己投影を可能にする「スター・システム」を生み出しました。ブロードウェイ・ミュージカル、ギャング映画やホラー映画、西部劇、洗練されたスクリーンボール・コメディといったジャンルの中で、人々は大恐慌時代を生き延びるために、困難に立ち向かうヒロイン、ヒーローに夢を託しました。その中の一ジャンルに「女性」映画と呼ばれるものがあります。スター・ヒロインを中心に、しばしば低予算で、女性の観客に向けて製作され、消費される映画です。30年代初頭、ジョセフ・フォン・スタンバーグ監督の『モロッコ』（1930）や『上海特急』（1932）で描かれたような、しばしば男性をリードする（マレーネ・ディートリッヒやグレタ・ガルボ）男性的な特徴をもったヒロインはやがて姿を消し、異性愛、家事、母性などに訴えかける作品が多く登場しました。40年代の「フィルム・ノワール」でそうした価値観に叛旗を翻す「危険な」ヒロインは、後にしばしば手ひどい罰を受けることになります。

30年代、40年代のハリウッドにおいて一定の型として確立し、現在に至るまで手を変え、品を変え、続いているこの「女性」映画というジャンルは、70年代以降、新たな視点をもって登場したフェミニズム映画理論に多くの議論の素材をもたらしました。映画に描かれたステレオタイプの女性の表象をめぐり出したり、「男らしさ／女らしさ」という後天的な規範の無根拠性をさらけ出したり、男たちの世界で作り出された「価値基準」に疑問符をつけたりしてきました。

1975年に発表され、その後、多くのフェミニズム理論に刺激をもたらし、同時に、かまびすしい議論を引き起こしたローラ・マルヴィの論文「視覚的快楽と物語映画」は、精神分析の理論を応用しながら、「性差が映像、エロティックな視線、そして美観（スペクタクル）を統御し、そして映画がどのように性差の社会的に制度化された認識を反映し、また矯正さえしてしまうのか」を明らかにするために、映画の中に組み立てられている視線と物語の構造を分析しています。

フェミニズム映画理論を詳述するのはこの稿の目的ではないので、その後の発展と論争については省略しますが、映画をご覧になるときに、ステレオタイプ化された表象を探したり、「価値のものさし」はどこにあるのかを考えたりすると、ずっとその映画に対する理解も深まるのではないかと思います。



4. 2000年代へ

90年代以降、世界的に活躍する女性の映画監督が増えてきました。前述のローラ・マルヴィの理論に影響を受けた『オランダ』（1992）のサリー・ポッター監督、『ピアノ・レッスン』（1993）で世界的な評価を受けたジェーン・カンピオン監督を始めとして、多くの才能をもった女性監督が自由に表現を始めました。木村満里子氏は、彼らは「企画段階から女性が撮る必然

性を求められて」おり、「女性監督たちは自分にしか撮れないものとは何か、常に向き合わなければならなかった」と述べています。同じように、日本でも、多くの「女性」監督が登場し、独自の感性や感情にあふれた作品を生み出し始めました。そこにわざわざ「女性」という修飾語をつける必要もないのですが、それでも彼らの作品を見てみると、映画の歴史はやはり男たちの手で作られてきたのではないかと、登場人物が相手役を見るその視線も、カメラが登場人物をとらえるその視点も、観客がスクリーンを見るその視線も、男性の視線であったのではないかと、ふと気付かされることがあります。『ゆるる』（2006）や『ディア・ドクター』（2009）で人間の複雑な内面を描き出した西川美和監督、『バーバー吉野』（2003）や『かもめ食堂』（2005）でゆったりとした豊かな空間を作り上げた荻上直子監督、『ウルトラミラクルラブストーリー』（2008）で従来の映画文法をややすくと乗り越えてみせた横浜聡子監督を始め、今後も続々と登場してくるであろう「女性」映画監督（もちろん、それ以外のスタッフや出演者も含めて）に、おおいに期待しているところです。彼らの作品に出会うことは、私たちの中にすでに組み込まれてしまっている「価値のものさし」を、もう一度検証し直す機会なのかも知れません。

デジタルビデオカメラ、パソコンによる編集作業の浸透によって、映画作りはずっと身近なものになってきました。映画学校も多数開設され、学びの場も増え、各地で開かれている映画祭によって発表の場も生まれてきました。3Dを始めとする技術の発展のみならず、映画はまだまだ新しい感性を待つ、新しい可能性を秘めた文化なのだと思います。

昨年末の「未来館シネマ倶楽部プレミアム」では、男女共生センターのご協力のもと、河瀬直美監督の『七夜待』を始め、2003年以降に製作された10本の映画をご紹介しますことができました。多様な社会の在り方、多様な生の在り方の中で、それを生きる人々の心のゆきに今後とも耳を傾けていきたいと思っています。



参考文献

- アリス・ギイ、ニコル＝リーズ・ベルンハイム編、『私は銀幕のアリス—映画草創期の女性監督アリス・ギイの自伝』、松岡葉子、向後友恵訳、パンドラ、2001年
- ジョルジュ・サドゥール、『世界映画史Ⅰ』、丸尾定訳、みすず書房、1981年
- ローラ・マルヴィ、「視覚的快楽と物語映画」、斉藤綾子訳、『新映画理論集成1 歴史／人種／ジェンダー』、岩本憲児・武田潔・斉藤綾子編、フィルムアート社、1998年
- 木村満里子、『「女子映画」の出現』、『日本映画は生きて 第8巻 日本映画はどこまで行くか』、黒沢清、吉見俊哉、四方田犬彦、李鳳宇編、岩波書店、2011年



とが大事だと考えています。団体やNPOで活動している方、ボランティア活動をしている方、起業しようとしている方などに対して、さらに前に進めていくための手掛かりを提供していくことが重要だと考えています。

飯館村の「若妻の翼」事業は、'89年にスタートし、女性がいきいきできる地域づくりのきっかけとなりました。当時の20代30代の女性がヨーロッパに行くのは大変でしたが、家庭内、地域内の軋轢を乗り越えて実現されました。ヨーロッパの農家で出会う男性たちは、家事を手伝うし、妻が作った料理を「おいしいね」と言ってくれる。自分は夫から一度も言われたことがない、どうしてこんなに違うの、というところから始まり、異文化交流・異文化体験を経て自分たちの生活を振り返り、地域での色々な自己表現活動を進めていきました。気付きの学びの機会を村が用意し、その後、地域に帰って取り組みが始まる、このようなことが県内各地で行われるようになると、本当に男女共同参画が地域に根付いていくと思います。センターはそれを支援していきたいのです。

3点目は、センターを「**交流・活動の拠点に**」したいということです。誰でもセンターに来てつながり交流し合える、そういう場になるべきと考えています。居心地のよい空間、1日中いることができるような空間、そういう「居場所」を作っていくことが大事だと思います。そのような空間が地域にたくさん作られていくことが必要だし、センターもそういう施設にしたいと思います。センターには泊まることもできますし、たくさんの方に利用していただきたいと思っています。

4点目は、「**人権の視点から幅広く**」です。女性だけでなく男性も障がい者子どもも、様々な方にセンターを利用してほしいと思います。1999年に男女共同参画社会基本法ができ、いよいよこれからという時に、「男女共同参画は問題、戦前の伝統的な男女のあり方こそ日本の本来の姿」というようにバックラッシュ（揺り戻し）が強まり、その影響で男女共同参画がトーンダウンしてしまいました。そこで考えなければならないのは、障がい者や高齢者への差別などの問題と男女共同参画は重なるにもかかわらず、これまで「男女共同参画が大事、高齢者問題は別」と理解していた面もあったのではないかと、私たちの問題の捉え方が少し甘かったのではないかと、ということです。人権という視点で考えれば、幅広く捉えて同じ土俵で議論し、様々な方と一緒に取り組んでいく必要があると思います。例えば、母親による児童虐待も、「子育ては母親」と責任を押しつけられ、誰にも相談で

きずに虐待が起こるといふことがあるのではないかと思います。男女ともに子育てをする環境、地域社会で支え合えるような環境、そして私たちがそれらを大切だと考える課題意識があれば児童虐待はもっと少なくなるかもしれません。

今の若い人はなかなか結婚しません。会津管内の未婚者へのアンケート調査で、「結婚しなくてもいいと思うのはどんな時?」という質問に男性の2割が「給料が安く2人で暮らせそうにない」と答えています。女性で一番多い回答は「仕事を辞めたくない」です。「結婚したいかどうか」という質問には男女とも9割方結婚したいという回答ですから、結婚はしたいが仕事と引き換えにというのはいやだということです。男性は「自分が稼ぎ頭にならないと養うだけの給料がない」、女性は「仕事に就きたい、仕事を辞めたくない」と男女の意識の差があります。回答者の年収は300万円未満が4割、女性は7割が300万円未満で、そのことが反映されている結果だと思います。ですから人権の視点から幅広く問題を捉え、センターで考えていく大きな課題の一つと捉えるべきだと思います。

韓国では「外国人花嫁」が増えています。人口2万人のある都市では250人の「外国人花嫁」がおり、約1,000人が多文化家族です。韓国政府はそのような人たちのために地域支援が必要と考え、スウォンの教会が政府から多文化家族の支援事業の委託を受け、韓国の社会・慣習を学ぶための講座を行っています。このようなことも男女共同参画ということで取り組んでいくことが大事だと思っています。日本では、韓国よりも10年くらい前から「外国人花嫁」を受け入れています。ボランティアや先進的な自治体が行っているほかは、多文化家族の支援はほとんど行われていない状態ですので、学ぶことがたくさんあると思います。

5点目は「**地域からの発信**」です。世界的な取り組みや中央の情報を地域に伝えることも重要ですが、地域から中央に発信していくことが重要です。中央の政策はどちらかというと都市中心の発想で必ずしも地域の実情を反映しているとは言えないからです。様々な課題を地域で生活している人に合わせて政策化することを考えた場合に、私たちが問題提起していくこともたくさんあると思います。飯館村の事例などは全国的にも先駆的な取り組みといえますので全国に発信していくことが大事です。県内においても様々な情報を発信していきたいと考えています。

これら5つを重点に置きながら、さらに地域に根ざしたセンターにするべく努力していきたいと思っています。

* ジェンダーギャップ指数 (GGI)

経済、教育、政治及び保健分野のデータから、各国内の男女間の格差を数値化しランク付けしたもの。世界経済フォーラムが毎年公表している。

未来館フェスティバル 2010

9月4日(土)、5日(日)の2日間、「未来館フェスティバル2010～挑み続けて10年!これからどこへ?未来館～」をテーマにフェスティバルを開催しました。開館10年目を迎えた今回のフェスティバルでは、シンボルイベントに国連女性差別撤廃委員会(以下:委員会)のドゥブラヴカ・シモノヴィッチ委員をお迎えし講演とシンポジウムを4日に開催しました。



ドゥブラヴカ・シモノヴィッチ委員

《シモノヴィッチ委員講演》

平成22年は日本における女性差別撤廃条約(以下:条約)の批准25周年にあたります。そこで、シモノヴィッチ委員は、委員会の総括所見をもれなく効果的に実施するよう働きかけること、及び日本政府による条約の選択議定書批准を目指した政府関係者等との話し合いを行うことなどを目的に来日されました。講演会では2009年に日本が提出した条約実施状況報告を受けての委員会の総括所見を踏まえ、条約の認知度を高めることの必要性、総括所見実施のためのフォローアップ手続き制度に基づく暫定的な特別措置、民法改正の2項目の実施状況報告、条約に合わせて国内の法体系を変えていく国際的な義務等(条約締約国の履行義務)の3点についてお話いただきました。また、第三次男女共同参画基本計画の決定により日本における女性差別の撤廃が進み、女性の地位向上につながることに期待を持たれていました。

《シンポジウム》

講演後には、コーディネーターに山下泰子さん(国際女性の地位協会会長・文京学院大学名誉教授)を、パネリストにシモノヴィッチ委員、林陽子さん(国連女性差別撤廃委員会委員・弁護士)を迎えたシンポジウムを開催しました。条約の目的は「女性に対するあらゆる形態の差別を撤廃すること」であり、男性と女性の完全なる平等を目標としていることから、達成のためには男性のシンポジウムの模様



パネリスト: ドゥブラヴカ・シモノヴィッチ委員



コーディネーター: 山下泰子氏
パネリスト: 林 陽子氏



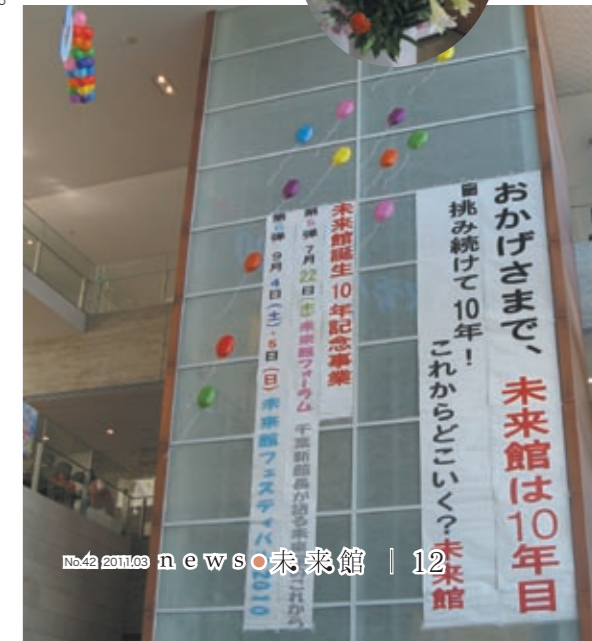
メッセージボード(二本松のちょうちん祭り太鼓台をイメージ)

関与が不可欠であること。また、条約が私たち一人ひとりの権利を保障していることを踏まえ、自分の問題として理解し、活用していくことが重要であること。さらに、総括所見が地方公共団体に対しても有効であることから、全ての立場の方が力を合わせ福島県についても変えていって欲しいなどの意見が出されました。また、会場からも積極的にシモノヴィッチ委員に対して質問が出されました。

なお、講演やシンポジウムの詳細な内容は「未来館NEWS 41号」に掲載しています。



生け花(環境美化ボランティア作品)



開館 10 年目を迎え記念事業として開催した今回のフェスティバルは、さらにたくさんの方々へ未来館を男女共同参画の「実践的活動拠点」として知っていただくとともに、にぎわいのあるイベントに参加していただくことで男女共同参画の理念に触れていただくきっかけとなるよう、「未来館フェスティバルをおもしろくするプロジェクト」パートナー、県民参加企画の皆さん、ボラン

ティアの方々をはじめとする関係者が力を合わせて盛大に開催しました。

2 日間にわたって開催された約 50 のイベントには、のべ 4,000 人もの皆さんが参加し、活気あふれるものとなりました。

研修ホール



10年のあゆみ展



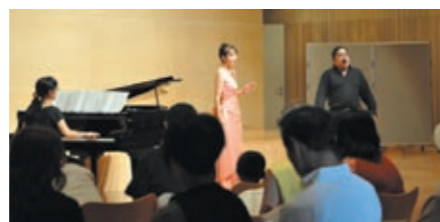
コーラス・アカシヤの合唱／コーラス・アカシヤ



朗読と音楽の万華鏡
／ボイスクラブ「こだま」



吹奏楽ミニコンサート／県立安達東高校



オペラ／福島オペラ協会



ダンスパフォーマンス
／パラダイス BOX NEO



フラダンス／フラレイラニカイ



フラダンス
／ブルメリアグループ&フラティアレ



Belly Dance Show／コマレオペリーダンスクラス

1F

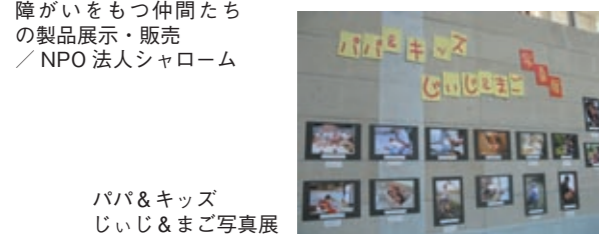


障がいをもつ仲間たちの製品展示・販売
／NPO 法人シャローム



一店逸品研究会／二本松市商店街連合会
一店逸品研究会

チンドン&マジックショー／安達太良チンドンや



パパ&キッズ
じいじ&まご写真展



ユニバーサルデザインの視点からの授産製品改良ワークショップ報告「売れる授産品つくっちゃいました」／NPO 法人シャローム



福祉用具の普及・促進PR
／(社) 日本福祉用具供給協会福島ブロック

2F



BDF (バイオディーゼル) 事業
／(社福) あおぞら福祉会 菊の里・二本松商工会議所女性会



二本松物産展／二本松市物産協会



宙の会 10年の歩み&カフェでおしゃべり
／宙の会



いきいきファッションショー
／高橋八重子さん



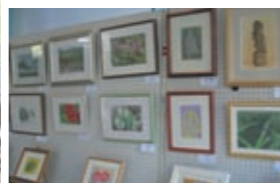
岡ちゃん先生のじっけん教室
／ふくしまサイエンスぐらっとフォーム



バルーンアート
／関根良栄さん



木の枝クラフト
／NPO 法人福島県もりの案内人の会



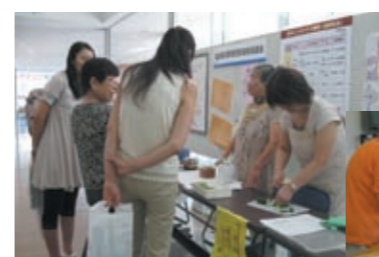
パステル画展／霞乃会



親子で折り紙で遊ぼう！
／亀谷いきいきサロン



フラで「智恵子抄」を踊りましょう
／フラスクール・ファンタジア
／フラブルメリアしらさわ



知ってますか？ 見えますか？
食品の表示
／福島県消費者団体連絡協議会



絵本カバーでエコバッグづくり



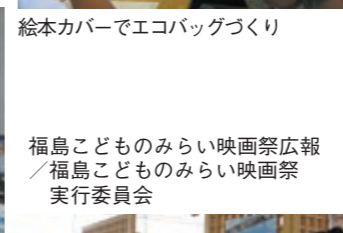
オリエンテーリング
／城山スポーツクラブオリエンテーリングサークル



すてきな飼い主になるために
／県北動物愛護ボランティア会 (Hal-Net)



金融・生活設計コーナー
／福島県金融広報委員会



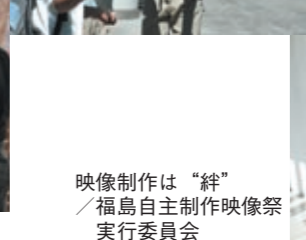
福島こどものみらい映画祭広報
／福島こどものみらい映画祭実行委員会



吹き矢で楽しもう！！
／日本ボーイスカウト福島連盟



昔なつかしい紙しばいやさん
／じゃっくあまのさん



映像制作は「絆」
／福島自主制作映像祭実行委員会

4F



茶道宗徧流お茶会席
／茶道宗徧流穂積宗雪社中



介護&子育てガイドのティールーム
／NPO法人まごころサービス福島センター



自分でごはんをつくろう
／ふくしま女性フォーラム



アニメ「こちらたまご応答があります」上映&トーク
／未来館フェスティバルをおもしろくするプロジェクト・パートナー&センターボランティア企画



性教育は、どう行ったらよいのだろうか。
／(社)国際女性教育振興会福島県支部

屋外



人権啓発
／福島人権擁護委員協議会二本松市部会



産地直売／安達地方農民連



チャリティーバザー
／二本松市婦人団体連合会



美味しい!楽しい!お好み焼き
／ブルドックソース(熨台支店)



西アフリカのお祭りを楽しもう!
／アフリカンジェンベチームゆるゆる



大盤ぶるまい
／二本松市婦人団体連合会

紙面の都合上ご紹介できませんが、その他沢山の団体・関係者の方にご協力いただきました。ありがとうございました。

運営にご協力いただいたボランティアの皆さん



「未来館フェスティバルをおもしろくするプロジェクト※」パートナー (50音順)

- | | | | |
|-------------|-----------|----------------------|-------------|
| ○にぎわいイベント担当 | ○県民参加企画担当 | ○ボランティア
コーディネート担当 | ○広報・記録・装飾担当 |
| 伊藤 幸子さん | 大松 良子さん | 国島 克子さん | 大竹 愛希さん |
| 斎藤 徹さん | 長澤 徳子さん | 斎藤 鈴子さん | 杵鞭 正光さん |
| 鈴木 登志子さん | 野内 千賀子さん | 杉林 千太子さん | |
| 橋本 典子さん | 渡部 八重子さん | | |

※フェスティバル実行委員会の名称です。

未来館誕生会



誕生記念のバースデーケーキ／職員製作!



千葉館長挨拶



実行委員会代表の
杉林さんの挨拶

平成 23 年 1 月 22 日 (土) に、これまで未来館を支えていただいた未来館フェスティバルプロジェクトパートナー及びフェスティバル出展団体の関係者、ボランティア、その他のセンター関係者が一堂に会した未来館誕生会が、未来館ボランティアの有志で組織された未来館誕生会実行委員会の主催により開催されました。

開催にあたっては、未来館誕生会実行委員会が、招待状の発送から誕生会当日の運営までの全てを自分たちで進め、当日は約 80 名が参加する盛大な会となりました。

実行委員会代表の杉林千太子さんの挨拶で始まった誕生会は、初対面の参加者同士が交流を深めたり、これまでのイベントの記録を懐かしく眺め旧交を温めたりと、終始和やかな雰囲気で行われました。

なお、誕生会に寄せられたメッセージを次ページで紹介しています。



参加者全員で乾杯



和やかに交流を深めました



参加者紹介



心尽くしの料理を囲んで

「未来館誕生会実行委員会」委員 (50音順)

- 杉林 千太子さん (実行委員会代表)
安部 玲子さん 安斎 幸子さん
植野 浩一さん 菅野 喜美子さん
国島 克子さん 佐藤 恵美子さん
嶋原 順子さん 菅野 福代さん
長澤 徳子さん 渡部 八重子さん

未来館誕生10周年 メッセージ

10th anniversary

これまでセンターに関わってこられた多くの方々や利用者の皆様から、未来館誕生10周年及び未来館誕生会に寄せてたくさんの心温まるメッセージを頂きました。メッセージは、未来館誕生会でご紹介したり、また、センター1階のエントランスにも掲示いたしました。今回はその中の一部をご紹介します。

(順不同、敬称を省略して掲載しておりますので、ご了承ください。)

福島県男女共生センター「女と男の未来館」誕生10年、おめでとうございます。

大雪の中、頑張って着物姿で、そして、素晴らしいセンターにしたいという固い決意でオープニングのセレモニーに臨んだこと、ついこの間のような気がします。歴代副館長、歴代職員の皆様方、そして10年間、年々成長して力の付いてきたプロパー職員の皆様方、更には、何の見返りも求めず献身的な貢献を続けて下さっているボランティアの方々、その他多くの皆様方のお陰で、センターは私の予想以上に立派なものになり、活動内容、事業内容も、おそらく日本一ではないかと、前館長のいき目もあるかもしれませんが、思っております。昨年のちょうど今頃は、10周年の記念事業をいくつも抱え、成功させることが次の10年への飛躍の礎になると信じ、職員と一丸となり、死に物狂いで全力投球していたことを、なつかしく思い出します。これもついこの間のことのように、もう一年もたってしまったなんて、信じられない気持ちです。でも、この10周年の記念事業を成功裏に終えたことが、職員の一体感、ボランティアの皆様や県民の皆様方のセンターに対する理解、関心、愛情を一段と育み、その後のセンターの活動の質を更に高めていると、嬉しく思っています。人生の大切な時期を、10年間もセンターと共に過ごした私にとって、共生センターは我が身内のように思えます。これからも未永く、応援していきたいと思っております。どうぞ、これからも、千葉館長のもとで、センターが益々発展し、福島県の男女共同参画社会実現のための、文字通り「渦の中心」として、更なる貢献をされることを、心から祈念しております。

福島県男女共生センター前館長 下村 満子

私の住む二本松市に福島県男女共生センター「女と男の未来館」がオープンして10年。

未来館って何をすると何？男女共同参画・ジェンダーって何？それが知りたくて。私自身もボランティア活動を始めて10年が経ちました。

その間、各種講座や講演会には受講生として、また、フェスティバルなどのイベント時には、ボランティア・パートナーとして参加するなど、ずっと共生センターと関わってきました。その中で、多くのことを学び、素敵な方たちと出会い、時には県外の男女共同センターに研修に行くなどボランティア活動を通して、沢山の元氣と福を頂きました。

そんな私を含めた未来館ボランティアが、共生センター誕生10周年を記念してこれまで様々なかたちでセンターを利用されてきた多くの皆様や団体の方々と共に祝いの会を開き、改めて交流の輪を拡げていきたいと思い、未来館誕生会実行委員会を立ち上げ、誕生会を開くこととなりました。

当日は、たくさんの皆様にご出席頂き、大変にぎやかで楽しい誕生会となりました。また、残念ながら欠席された方々からも、温かいメッセージを寄せていただくなど、当日お手伝いいただいたボランティアの皆さんと共に、実行委員会一同心からうれしく感謝しております。また後日、参加された方々から「大変楽しく、また、他の団体の人たちと情報交換するなどの交流ができて有意義でした。年に1度くらい、このような交流会を開いて欲しい。」とのお話も頂きました。

これを機会に、11年目に入る共生センターのボランティア活動をより充実したものにしていきたいと皆と話し合いを重ねています。

ボランティアってメッチャ楽しい！！

これからも、「男女共同参画」は“人は宝”という気持ちを大切に、共生センターに関わるたくさんの方々や交流を深め、共に楽しみながら学んでいきたいと思っております。

未来館誕生会実行委員会 代表 杉林 千太子

皆様から寄せられたメッセージのボード



祝 開館10周年。混迷する社会情勢の中、女性の能力を活用することの重要性が増していきます。皆様の活躍を期待しています。
前副館長 後藤 勝雄

誕生10年おめでとうございます。大雪の中での開館、懐かしく思い出されます。男女共生の拠点として、ますますのご発展を祈念しております。
元職員 五十嵐 孝子

未来館誕生の折、ボランティアとして参加できたこと、そしていろいろな方々と交流できたことは大きな収穫でした。ありがとう未来館、そしてこれからも！！

センターボランティア等 野内 佳子

21世紀のスタートとともに、2001年1月18日に未来館がオープンした感激は一生忘れることができません。それは館長さん、副館長さんをはじめとする事務局の方々のご指導と多くのボランティアの方々の協力の喜びがあったからだと思います。その後センターの三つの基本理念である「情報機能・自立機能・交流機能」に基づいて実施される会に数多く出席し研修させていただき感謝の誕生会を迎えました。

センターボランティア等 遠藤 康代

楽しい会話ができて、地域に必要な居場所として未来館の輪が広がりますように！！

センターボランティア等 小泉 マサ

言葉だけではない、本当の意味での「男女共同参画社会」実現を目指し、福島県が先頭を走る気持ちでこれからも頑張ります！！

センターボランティア等 根本 弓月

開館時の職員といたしましては、10周年は感無量です。スタッフやボランティアの皆様をはじめ、未来館にかかわってくださった皆様、ありがとうございます。未来館を拠点として今後も男女共同参画社会の形成に向けた歩みが着実に進んでいきますように。

元職員 鈴木 千賀子

福島県の男女共同参画の中核施設としてさらに飛躍されるよう、これからの十年の活動に期待しています。

センターボランティア等 宍戸 志津子

ささやかですが、お手伝いをさせて頂いたおかげで、知識や友だちをえてボランティアの楽しさをわからせていただきました。感謝しています。

センターボランティア等 鈴木 黎子

10年間に築かれた礎をもとに、子どもからお年寄りまで地域に根付いた未来館に更なるパワーアップを！！

県民参加企画団体代表 斎藤 千江子

あっという間の10年が過ぎました。仕事が忙しく出席できないことが多く、世代を越えたコミュニケーションとして共通の話題があること、いろいろな交流イベント・講演会への参加・環境づくりが大切な積み重ねだと感じました。

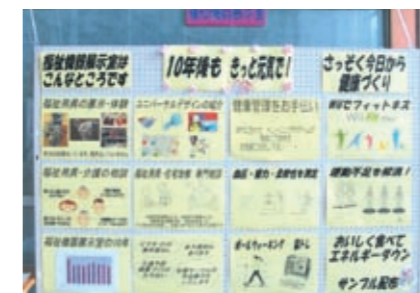
センターボランティア等 安齋 幸子

未来館誕生 10 年記念展示

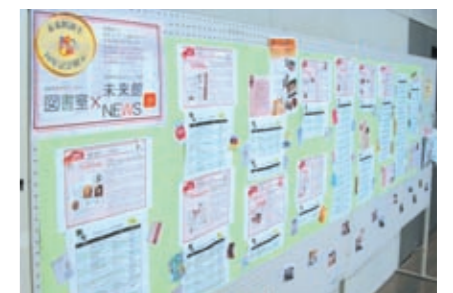
相談事業・福祉機器展示室・図書室の10年をふり振り返り、また、現在の取り組みを紹介する記念展示コーナーも設けました。



相談事業



福祉機器展示室



図書室

開館10周年記念 宿泊料「半額」キャンペーンを 実施しています!

男女共同参画目的
利用者対象

当センターの開館10周年を記念して、「男女共同参画目的」で宿泊室をご利用の方を対象に、通常の宿泊料の「半額」で宿泊できるキャンペーンを実施し、皆様の男女共同参画社会の実現に向けた活動をサポートします!

1 対象

- ①当センターの研修室(研修ホール・調理室等を含む)を「男女共同参画目的」で利用し、宿泊される方
- ②当センター主催事業に参加し、宿泊される方

※センター主催事業以外のご利用の場合は、利用目的が分かる資料を提出していただく場合もあります。
※センター主催事業の当日及び前日の宿泊が対象になります。
※他施設の男女共同参画関連のイベントに参加される方には適用されません。

2 キャンペーン期間中の特別料金 (※お一人様の料金で税込みです。)

- ・1室1名でのご利用 お一人様 **2,100円** (通常料金 4,200円)
- ・1室2名以上でのご利用 お一人様 **1,900円** (通常料金 3,800円)

☆男女共同参画に関する内容での団体・グループ向け宿泊研修等に最適です!

☆研修内容によっては、当センター職員を講師等で派遣することもできます。(無料)

☆男女共同参画目的で宿泊される方のキャンセル料(ご宿泊当日に利用をキャンセルした場合)

- ・1室1名でのご利用で申請された方は2,000円
- ・1室2名以上でのご利用で申請された方は1,800円

企業の研修担当の皆様!

この機会に男女共同参画に関する講義(ワークライフ・バランス関連の研修や女性管理職研修、男性の育児・介護休業取得セミナーなど)を盛り込んだ社内研修を企画してみませんか?

宿泊室は、洋室 19 部屋、和室 3 部屋で 最大 50 名様までご宿泊可能

全室バス・トイレ付き。また、TV、ドライヤー、浴衣、タオル、シャンプー、リンス、ボディーシャンプー、歯ブラシ(T字カミソリ)も備え付け。

洋室 (ツイン)

- 1泊 シングル利用 4,200円
- ツイン利用 1人 3,800円



和室 (宿泊定員 4 名)

- 1泊 1人利用 4,200円
- 2人以上利用 1人 3,800円



※料金は通常の場合の価格です。

申込方法

キャンペーンの詳細は下記までお問い合わせください。

福島県男女共生センター 企画調査課 TEL 0243-23-8303 MAIL mirai@f-miraikan.or.jp

mi rai kan
未来館
news

福島県男女共生センター 広報誌

2011.3 vol.42

■編集・発行

(財)福島県青少年育成・男女共生推進機構 福島県男女共生センター (女と男の未来館)

〒964-0904 福島県二本松市郭内一丁目196-1

TEL(0243)23-8301(代) FAX(0243)23-8314

ホームページアドレス <http://www.f-miraikan.or.jp>

メールアドレス mirai@f-miraikan.or.jp

女と男の未来館

検索